

北九州市保健環境研究所報

第 48 号

(令和2年度)

北九州市保健環境研究所



北九州市民憲章

わたしたちのまち北九州市は、美しい自然に恵まれ、ながい歴史とたくましい産業をうけついできました。

わたしたち北九州市民は、このまちを愛し、よりいっそうの市民参加によるまちづくりをめざしています。

このふるさとに、実りある未来を築くため、わたしたちは、みんなで守る約束を定めます。

緑を豊かに 清潔で美しいまちにします

きまりを守り 安全なまちにします

人を大切にし ふれあいの輪をひろげます

元気で働き 明るい家庭をつくれます

学ぶ楽しさを深め 文化のかおるまちにします

はじめに

保健環境研究所報第48号の発刊に際しまして、ご挨拶を申し上げます。

平成3年4月、新規採用職員として最初に配属された職場がこの研究所でした。行政依頼検査に加え、導入されたばかりの最新型ガスクロマトグラフ質量分析計を駆使して、様々な調査研究に明け暮れていたことを思い出します。本年4月に当研究所の所長を命じられ、何か感慨深い気もしますが、同時に責任の重さを痛感しているところでございます。

現在、世界規模のパンデミックが続いている新型コロナウイルス感染症ですが、この夏発生した「第5波」が、ここにきて急速に収まってきました。人々の行動自粛やワクチン接種の効果など様々な要因が考えられますが、感染再拡大の懸念が完全に払拭された訳ではありません。当研究所におきましても、今後も気を緩めることなく職員一丸となって、この難局を乗り越える必要があると認識しております。

話は変わりますが、長引く新型コロナウイルスとの戦いの中、今夏には1年延長された東京五輪・パラリンピックが開催され、ほとんどの競技が無観客であったとはいえ、国民に大きな感動を残し無事に終了しました。さらに、本市におきましても10月に世界体操・新体操選手権が史上初めて一つの都市で同時期に開催されました。これらのイベントはコロナ禍にあって数少ない明るい出来事だったものと思われまます。

今回の新型コロナウイルス感染症対策では、地方自治体の研究所が大変重要な役割を担っていることが改めて認識されました。発生初期から国立感染症研究所と連携した迅速かつ正確な検査対応、変異株スクリーニング検査やゲノム解析による確定検査など地方自治体における科学的かつ技術的な中核施設として不可欠な存在であることが示されました。

一方で、専門的かつ高度な技術力を持った人材の育成、緊急時の検査体制の構築、情報発信のあり方などといった課題も浮き彫りになってきました。これらの課題についてしっかりと検証するとともに、将来、新たな感染症が発生した場合に備えておくことが求められます。

環境分野における課題も、私の入職時と比べ大きく変化してきています。当時は、既に地域レベルの産業公害は終焉し、地球規模の環境問題へと時代の様相が変化しつつある時期でした。21世紀に入るとその傾向はさらに強くなり、近年は、気候変動適応策、プラスチックごみによる海洋汚染などより広域的な視点から取り組まなければならない課題への対応が急務となってきました。今後、研究所としてどのように関わっていくのか、大いに議論すべき時期が来ているものと思われまます。

最後になりますが、今後も地方自治体の公的試験研究機関として、保健衛生・環境政策の両面を技術的に支援してまいりますので、皆様方のより一層のご指導ご鞭撻を賜りますようよろしくお願い申し上げます。

令和3年10月

北九州市保健環境研究所
所長 佐藤 健司

目 次

第1	沿革・組織及び概要	
1	沿 革	1
2	組 織	1
3	検査件数	2
4	決算・予算概要	3
5	分析機器整備状況	4
第2	業務内容	
1	試験検査等	
	環境部門	5
	衛生化学部門	8
	微生物部門	14
2	調査研究	20
3	そ の 他	27
第3	講演発表	
	・PMF法によるPM2.5の発生源寄与解析において同一解を得るための検討 (第61回大気環境学会年会)	28
	・酸性タール色素分析 －辛子めんたいこにおける沈殿発生・溶解及び精製方法の検討－ (第57回全国衛生化学技術協議会)	30
	・ネオニコチノイド系農薬類の環境調査	32
	・泡消火剤の作物、土壌及び環境水中の残留について	34
	・過酸化水素分析－数の子中の残存カタラーゼ不活性化法の検討－	37
	・明太子におけるリステリア・モノサイトゲネスの汚染実態 (令和2年度保健福祉研究発表会)	39
	・北九州市で繰り返し検出されているカルパマーゼ非産生 <i>Klebsiella aerogenes</i> の遺伝的関連性の評価	41
	・北九州市内で検出されたノロウイルスの遺伝子型について(H24～H30)	44